

2011 年度博士学位論文 要旨

地域コミュニティにおける余暇活動を通じた
高齢者の社会関係の形成

ソーシャル・キャピタル醸成と関連する

「犬の散歩」をきっかけにした社会的ネットワークの特徴

桜美林大学大学院 国際学研究科 老年学専攻

菊池 和美

目次

はじめに.....	1
I. 研究の背景.....	2
1. 「犬の散歩」をきっかけにした高齢者の社会的ネットワーク.....	2
2. 高齢者の社会関係.....	3
3. 高齢者の余暇社会活動.....	5
4. 地域コミュニティにおける高齢者支援.....	6
5. 地域コミュニティにおけるソーシャル・キャピタル醸成.....	8
II. 研究目的.....	10
III. 研究デザインと操作的定義づけ.....	11
IV. 研究 I 高齢者により地域コミュニティで行われている「犬の散歩」の特徴.....	13
1. 背景.....	13
2. 目的.....	14
3. 方法.....	14
1) 対象者.....	14
2) 時期.....	15
3) 手順.....	15
4) 分析方法.....	16
4. 結果.....	16
5. 考察.....	18
1) 余暇社会活動の分類.....	18
2) 地域コミュニティで行われている余暇社会活動の特徴.....	22
3) 「犬の散歩」とさまざまな余暇社会活動の比較検討.....	27

4) ソーシャル・キャピタル醸成に寄与する「犬の散歩」の活動条件.....	29
6. 結論.....	31
V. 研究Ⅱ「犬の散歩」をきっかけにした地域コミュニティにおける高齢者の社会的ネットワーク.....	32
1. 背景.....	32
2. 目的.....	32
3. 方法.....	33
1) 観察地点.....	33
2) 対象者.....	34
3) 観察方法.....	34
4) 記録方法.....	35
5) 分析方法.....	36
4. 結果.....	37
1) 抽出された頻出語.....	37
2) カテゴリー分類の結果.....	39
5. 考察.....	42
1) 交流のカテゴリー分類の特徴.....	42
2) 社会的ネットワークの特徴.....	45
3) ソーシャル・キャピタル醸成に寄与する特徴.....	47
4) 「犬の散歩」の地域コミュニティにおける課題.....	49
6. 結論.....	51
VI. 研究Ⅲ「犬の散歩」をきっかけにした地域コミュニティにおける高齢者の社会貢献活動.....	53
1. 背景.....	53
2. 目的.....	54

3. 方法.....	54
1) 対象者.....	54
2) 調査手順.....	55
3) 分析方法.....	56
4. 結果.....	58
1) 頻出語の分析結果.....	58
2) 意味別分析の結果.....	60
3) カテゴリー分類の結果.....	61
5. 考察.....	63
1) カテゴリー分類の特徴.....	63
2) 活動を推進する社会的ネットワークの特徴.....	68
3) ソーシャル・キャピタル醸成に寄与する特徴.....	71
6. 結論.....	75
VII. 総合考察.....	76
1. ソーシャル・キャピタル醸成に寄与する「複雑な」ネットワーク.....	78
1) 強い求心力と緩やかな繋がりを同時に保つネットワーク.....	79
2) 旧来からの関係性と新たな関係性を同時に保つネットワーク.....	80
3) 個々のネットワーク成員が有する関係財に対する再認識.....	81
2. ソーシャル・キャピタル醸成に寄与する上での課題.....	82
1) 我が国の地域コミュニティを取り巻く現状.....	82
2) 地域コミュニティにおける社会関係形成と維持.....	84
3) 社会関係形成のきっかけとなる余暇社会活動の発掘.....	88
4) 高齢者ヘルスプロモーションへの適用.....	90
総括.....	93

おわりに.....	94
附記.....	95
謝辞.....	96
文献.....	97

I. 研究の背景

わが国の「ペット」としての「犬」の飼育数は1000万頭を超え¹⁾、社会経済的現象の一つとして注目を浴びる一方²⁾、地域全体の問題となっている^{3, 4)}。高齢な飼い主の数も引き続き高い割合を占めているが、これまでの高齢者とペットをめぐる研究では、心理的・身体的・生理的効果に関する研究が中心で^{5, 6, 7, 8)}、地域社会から見た議論は乏しい^{9, 10)}。「ペット」に関連した活動の中でも「犬の散歩」は、飼い主にとって日常的に地域近隣で行う活動である。近年、高齢者にとって適度の運動強度を持つ運動として注目され^{11, 12)}、また交流促進や^{13, 14)}、ソーシャル・サポート¹⁵⁾、ヘルスプロモーションにも有効と指摘されている¹⁶⁾。

高齢者のwell-beingの実現を図る上では、余暇の充実が重要な課題とされる^{17, 18, 19)}。しかし「犬の散歩」のように、これまで余暇活動と考えられてこなかった活動を含む広義の余暇活動（以下、「余暇社会活動」と表記する）の現状は必ずしも明確とは言えない。高齢者にとって、社会的な交流関係の質と量の確保は重要である^{20, 21, 22, 23, 24, 25, 26)}。また実際には、交流を制限する要素が多く²⁷⁾、関係性の維持困難や希薄さが指摘されてきた^{28, 29)}。高齢者の「余暇社会活動」への参加は、こうした交流機会確保への期待が高く^{30, 31)}、これまでさまざまな支援に活用されてきた^{32, 33)}。しかし、クラブ活動や勉強会、趣味の教室等、これら高齢者支援を目的とした「余暇社会活動」には、継続性や発展性の上で問題が指摘されてきた^{33, 34, 35)}。また、身近に情報をもたらす知人や一緒に参加できる人がいないと参加につながらないことや^{36, 37)}、そもそも高齢者本人に目的が見いだされない活動では、交流の継続が難しいことも指摘されている³⁸⁾。

高齢者のヘルスプロモーションにおいては、主体的な形で高齢者の社会参加を促し、地域交流を活性化することが求められる^{36, 39, 40)}。しかし、健康な高齢者を含むすべての高齢者を支える新たな仕組みを構築するうえでは、「地域コミュニティ（いわゆる「近所づきあい」よりも広域な日常生活の場、徒歩30分程度の日常生活圏、ほぼ一中学校区に相当する物理的な範囲）」⁴¹⁾の機能の回復、即ち、高齢社会の当事者である、高齢者自身を含む「地域コミュニティ」全体の「ネットワーク」と、「互酬性の規範（お互いさまという意識）」、「安全・安心（・信頼）」の連鎖によるソーシャル・キャピタル（社会関係資源）の醸成が、重要なカギとなる^{17, 42, 43)}。ソーシャル・キャピタルは、高齢者支援のさまざまな議論において^{44, 45)}、また、ヘルスプロモーションにおいて、死亡率低下^{46, 47, 48, 49)}、主観的健康や精神的健康の高さ^{17, 50, 51, 52, 53, 54)}、自殺の低下⁵⁵⁾などとの関連で研究が行われてきた。しかし我が国では、具体的な事象の蓄積には乏しく^{56, 57, 58)}。どうすればソーシャル・キャピタルを復活、もしくは生成し蓄積することができるのかといった研究は不足している⁵⁹⁾。

「地域コミュニティ」の健康な人を含むすべての高齢者を支援する仕組みづくりには、高齢者自らが「地域コミュニティ」の中で、自然発生的に行っている活動の中から、社会関係形成を促進する要素や、ソーシャル・キャピタル醸成に寄与する要素を見出す必要がある。即ち、高齢者の「地域コミ

コミュニティ」における社会関係形成を促進するためには、その関係性の源泉たる活動の特徴と、ネットワークの形成や発展過程の経緯を明らかにすることが求められる。

II. 研究目的

高齢者が、自由な時間の楽しみとして、能動的に行っている「余暇社会活動」として「犬の散歩」を取り上げ、「地域コミュニティ」レベルで、実際に高齢者が「犬の散歩」をきっかけとした交流関係を基に、ソーシャル・キャピタルの醸成に寄与する、いかなる活動を行い得るのか、どのような交流関係性がそれを可能とするのか実証的な検討を行う。

III. 研究 I 高齢者により地域コミュニティで行われている「犬の散歩」の特徴

1. 目的

本研究 I では、「地域コミュニティにおいて行われている余暇社会活動」にはどのようなものがあるか、従来の余暇の枠組みにとらわれず幅広い活動を取り上げ、高齢者自身にとっての意味合いを重視した内容検討を行い、その中における「犬の散歩」の活動特徴を明確化することとした。

2. 方法

対象者は、1都8県に居住の65歳以上のIADLに障害のない方、71名（男性15名、74.3±8.4歳、女性56名、74.0±6.6歳）とした。事前に研究趣旨説明を行い、同意を得た上で、2008年7月の4週間の期間に、自宅を訪問し半構造化面接による調査を実施した。あらかじめ質問項目を提示した上で口頭により、年齢、性別、居住地域、主観的健康感、さらに広義の余暇活動として「自由な時間の楽しみとして行っていること」について聞き取り記録した。また許可を得て録音し、その逐語録から、余暇活動の名称、参加頻度（「ほぼ毎日」、「週に一度」、「月に一度」、「年に一度」）、活動範囲（「自宅（室内）」、「自宅周辺（室外）」、「地域コミュニティ内」、「地域外」）、交流（活動をきっかけとする出会い）の有無に関する情報の補足を行った。収集した活動の種目名については、レジャー白書^{60, 61}、「団塊世代が10年後に参加したい活動」⁶⁰、「高齢者のための興味チェックリスト」⁶²をもとに表記のゆらぎを調整し、さらに複数の研究対象者とともに、KJ法による分類を行った⁶³。尚、本研究は2007年10月に帝京平成大学倫理委員会の承認を得て実施した。

3. 結果

インタビューにおいて合計で256種目（対象者一人あたり1から8種目、平均3.4±1.5種目）があげられた。種目は、多い順に「園芸」、「旅行」、「テレビ」となり、頻度は、「月に一度」、

「年に一度」，「ほぼ毎日」，「週に一度」の順に行われている物が多く，活動範囲別では，「自宅周辺（室外）」，「地域コミュニティ内」，「自宅（室内）」，「地域外」の順となった．意味解釈を行ったのち，同義語を取りまとめ，表記の揺らぎを調整した結果 88 種目に絞られ，さらに KJ 法による分類を経て，「スポーツ」として「サイクリング」，「山登り」など 18 種目が，「趣味・教養」として「編み物」，「詩吟」，「カラオケ」など 25 種目が，「日常生活関連活動」として「料理」，「園芸」，「散歩」，「地域清掃」など 29 種目が，「仕事の活動」として「畑仕事」や「仕事」など 6 種目が，また「非日常のイベント」として「旅行」，「法事」，「クラス会」など 10 種目が分類された．

4. 考察

研究 I においては，高齢者が「自由な時間の楽しみとして行っている活動」として，従来の余暇活動の枠組みに捉われない様々な活動が挙げられ，スポーツ，日常生活関連活動，仕事の活動，趣味・教養，非日常のイベントの各分野に分類された．このうち「犬の散歩」をはじめ様々な「地域コミュニティで行われている余暇社会活動」が各分野に重複して存在することが指摘された．またソーシャル・キャピタル醸成に関わる共通の特徴として，①目的と「意味のある活動（作業）」⁶⁴⁾である点，②気軽な交流が可能である点，③コミュニケーション媒介となる人・物・出来事がある点，④日常的に行われ頻度が保たれている点，⑤地域性を保つ適度の距離がある点，⑥自ら行う能動的な活動である点などが指摘され，「犬の散歩」は，これらの特徴をバランスよく有する活動であることが指摘された．

IV. 研究Ⅱ：「犬の散歩」をきっかけにした地域コミュニティにおける高齢者の社会的ネットワーク

1. 目的

高齢者が，「地域コミュニティ」において「犬の散歩」をきっかけとしてどのような交流を行っているのか，参与観察に基づく分析を試み，「地域コミュニティで行われている余暇社会活動」としての「犬の散歩」をきっかけに，形成される社会的ネットワークの特徴を明らかにすることとした．

2. 方法

調査対象の「地域コミュニティ」は，都内 A 区南西部に位置する B 地区（人口：30,851 人，世帯数：14,195 世帯，高齢化率：25.7%，面積：3.976 km²，10 軒に 1 軒が犬の所有あり）である⁶⁵⁾．観察地点は，B 地区内の C 川沿い北よりにある緑道形式の公園の一角，D 地点とした．対象者は，前述の観察地点で「犬の散歩」をしている人，およびこれらの人と何らかの会話を行った人とし，調査主旨の説明と記録内容の提示を行い，研究協力の了承を得ることとした．

調査は、筆者自身が犬を連れて観察地点の周辺に滞留することでフィールドエントリーを果たした後、予備調査観察を経て、2008年7月から翌2009年6月に行った。全体を4期に分け1期につき2週間程度、荒天の日を除く、日没30分前の15分間に実施した。観察内容は、対象者および対象者に話しかけた人との間の会話および、それに付随して生じた対象者の反応である。具体的には、対象者の「話しかけた言葉」と「話しかけられた言葉」（以下、両者を合わせて「きっかけとなった言葉」と記す）に絞ることとした。記録の際には、会話に伴って生じたノンバーバルな反応も合わせて記録した。尚、すべての観察記録内容は、観察終了の直後に逐語録を作成し、フィールドノート化した。尚、これらノート作成に当たっては、個人情報保護の観点から、当初のメモの段階から、個人名や固有名詞をイニシャル等の記号に置き換え、情報保護など倫理面にも配慮した。分析にはSPSS Text Analysis for Surveys Ver3.0 (IBM) を使用し、パソコン入力を経てデータ化した「きっかけとなった言葉」を、意味のある最小単位の言語レベルに分解し、その出現頻度を数量化した。出現頻度30回を一定の基準とした頻出語を抽出し、この頻出語を含む原文について、もともとの会話の意図する内容をくみ取ることができるよう考慮しながらコーディングと軸足コーディングを行った。尚、本研究は2010年12月に帝京平成大学倫理委員会の承認を得た。

3. 結果

観察は、4期合計で45回実施した。対象者は57名（男性30名、女性27名）であった。このうち犬を連れていた人は52名（男性26名、女性26名）であった。観察対象者の延べ人数は337名、このうち犬を連れていた人は296名であった。対象者の年齢は、60歳代が36名、70歳代が19名、80歳代が2名であった。記録された会話に含まれた単語総数は1,0869個。このうち「きっかけとなった言葉」として分析対象とした言葉は、5,498語。これを単語レベルで分析した結果、30回以上出現した頻出語は23語であった。これら23語を含む会話原文の意味解釈を行い、コーディング、軸足コーディングを行った結果、「あいさつ」、「確認」、「情報交換」、「関係性の展開」の4つのカテゴリーが分類された。「あいさつ」のカテゴリーには、「こんにちは」、「じゃあね」など出会った際と別れの際の挨拶、「お手」など犬への声かけの言葉（男女の別なく年齢も多岐にわたる）が分類された。また飼い主同士がすれ違う際に声を掛け合う、「すみません」も含まれた。「確認」のカテゴリーには、「この間もお会いしましたよねえ」と特定の犬（人）かどうかを確認する言葉や、「今日はお父さんと一緒なのね、お母さんはどうしたの？」など、それ以前に会っていることを前提に相手を確認する言葉が分類された。「情報交換」には、「最近」、「先日は」という話し始めで、互いの近況についての会話や、世間話、地域の噂話が分類された。「関係性の展開」には、「うちの旦那は・・・」、「孫が来ているのよ」など、互いにバランスを保った個人的な話題や、「今度のバザー参加しない？」など、「犬の散歩」以外の活動への派生が示唆される言葉が分類された。

4. 考察

観察地点において対象者らは、単に「犬の散歩」で出会った人に挨拶し、自然に声を掛けあっているのみならず、犬を介して互いを繰り返し「確認」し、また、身近な地域の話題や噂話、世間話等を通して、互いの「情報交換」を行うなかで、選択的な「関係性の展開」の機会を得ていることが明らかとなった。これらの交流は、段階的に生じるものではなく、観察地点の狭いエリアにおいて、同時並行的に複数の人々の間で生じていることが確認された。コンボイ・モデル⁶⁶⁾の辺縁に位置する「(初対面の人を含む)弱い紐帯」から「強い紐帯」までの様々な紐帯(関係性)の人々が同時に同じ場所に会す。対象者らは、観察地点を含む「地域コミュニティ」における「自由な時間の楽しみとして」、「犬の散歩」をきっかけに互いに「あいさつ」をする程度の、あるいは互いに相手を「確認」しないとわからない程度の弱い紐帯による「自然発生的で緩やかな関係性」^{67, 68)}を中心としたネットワークでありながら、様々な「情報交換」を通して、ネットワーク内に多数のブリッジを形成することで、選択的に「関係性の展開」を生じ、「緩やかなネットワーク」を形成させていることが明らかとなった。「地域コミュニティ」において「犬の散歩」をきっかけに、これらの交流が同時並行的に行われることにより、いわば交流のための「プラットフォーム」⁶⁹⁾が形成され、継時的変化だけでは引き起こし得ない多くの人々の間に「関係性の展開」が生じることを可能としたものと考えられた。一人一人のパーソナル・ネットワークで生じたこれらの「関係性の資源化」は、「地域コミュニティ」のソーシャル・キャピタルの構成要素として、ソーシャル・ネットワークを人々の意識の上で顕在化させることに貢献したものと考えられた。

V. 研究Ⅲ：「犬の散歩」をきっかけにした地域コミュニティにおける高齢者の社会貢献活動

1. 目的

研究Ⅲにおいては、研究Ⅱで指摘された「関係性の資源化」により、「犬の散歩」をきっかけとして人々の間に形成された社会的ネットワークが、いかに地域貢献活動の推進に関わるのか実証的に分析することとした。

2. 方法

対象者は、都内A区、B地域で組織されている「わんわんパトロール隊」の役員7名(男性3名、女性4名、年齢60~80歳代)とした。同組織は、飼い主らが中心となって6年前に結成された地域貢献活動グループで、地元警察署や保健所、小学校等との連携を図り、地域の小学生の登下校の見守りや、地域の老人施設への訪問活動、地域清掃、区民祭りや町内会等のイベント参加、クリスマスイルミネーション企画など、多岐にわたる地域活動を行っている。

調査は、まず同グループのイベント等へ筆者自身がボランティアとして参加しフィールドエントリーを果たし、次に対象者らに対し、本研究の研究目的と調査方法の説明を行い、研究への協力の同意を得て、2008年10月から2009年1月の間、対象者間または対象者から他メンバーへの情報発信や連絡を目的とした電子メールの「やり取り（本文）」の同時添付を受け、メール386通（送信先数は56件）をパソコン上でフィールドノート化した。尚これらのデータは、対象者らの個人情報の保護の観点から、メール内容はデータ化の段階より個人名団体名のイニシャル化や削除、また対象者らへの内容紹介と承諾を得て実施した。解析には、SPSS Text Analysis for Surveys Ver3.0（IBM）を用い、頻出語と、文章の意味別分類（ネガティブなもの、ポジティブなもの、その他の3分類）の上位語5位までを占めた文章の原文をすべて選び出し、コーディング、軸足コーディングを経て、カテゴリーの分類を行った。一連のコーディングの作業過程においては、習熟者の助言と、共同研究者ら複数名の協力を得た。尚、本研究は2010年12月に帝京平成大学倫理委員会の承認を得て実施した。

3. 結果

分析対象となったすべての文章の数は1,803個、文章中に含まれた品詞別の語数は、種類別に、名詞が1,557語（メンバー名や地域の地名が698語）、動詞は881語となった。言葉の揺らぎを調節し、全体を4群に分けて分析した結果、すべての群に共通して30回以上出現した頻出語25語と、文章の意味別分類において出現頻度の高い順に上位5位までの語彙を含む原文、合わせて1,087個の文章を対象として、コーディングを経てカテゴリーの分類を行った。その結果、「人的社会的資源の再認」、「能動的な活動への関わり」、「協力の依頼と勧誘」、「次のイベントの計画」の4カテゴリーに分類された。「人的社会的資源の再認」には、「〇パパにトラックを出していただきましょう」、「犬用のご飯は、〇さんに準備お願いしようよ」、「小学校でテントを貸してもらえそう・・・」、「保健所にもお願いしてみたらいいと思うけどなあ」や、「〇〇さんのところ〇〇クラブの先生だったんだって」、「今度のお祭りで30年ぶりに山車を出すらしいよ」が分類された。「能動的な活動への関わり」には、「それ、〇さんと私とでやりますよ」、「タイムスケジュール作ってみました。どうかしら?」、「〇〇は、いつ受け取りに行くか相談しましょう」が分類された。「協力の依頼と勧誘」には、「ポスター、〇丁目の掲示板にも貼らせてもらおうよ」、「打ち合わせの時のケーキ美味しかったですね。作り方教えてください」、「Bさんに、これを持ってきていただけるようお願いしてみよう」などが、また、「次のイベントの計画」には、「今度の5周年企画どうしようか?」、「考えてみたけど、今度はフリーマーケットやってみようよ」、「〇〇さんに説明をおねがいして、講習会なんてどう?」、など、次の活動の計画や新たなアイデア、また現在行っている活動に対する提案などが分類された。

4. 考察

「わんわんパトロール」の中心メンバーとして活動運営に関わる研究Ⅲの対象者らの交流は、「人的社会的資源の再認」、「能動的な活動への関わり」、「協力の依頼と勧誘」、「次のイベントの計

画」の4つのカテゴリーに分類された。「わんわんパトロール隊」の中心メンバーである対象者らは、常に人的社会的資源を最大限に活用すべく、地域の「人・物・出来事への関心」を払い、「強い紐帯（で結びついたメンバーら）の能動的な活動」により、また一方で対象者それぞれの「犬の散歩」をきっかけとした「弱い紐帯の力」⁷⁰⁾を活用し、幅広く多様な地域の人々や組織の協力を得ながら、地域のさまざまな人と組織に「協力の依頼と勧誘」の働きかけを行い、その恩恵を受け、感謝をしつつ、次々と先の計画を立てながら「活動を推進」していた。この活動を推進する過程で行った様々な交流は、対象者ら主要メンバーの間のみならず、地域コミュニティの人々や組織との間に、「わが町意識（安心・安全・信頼感）」を高めたものと考えられた。また、この活動の推進に協力し実際に社会貢献活動へと関わる中で、「地域コミュニティ」の多くの人々の間に「お互いさまという意識（互酬性の規範）」が生じたものと考えられた。「犬の散歩」をきっかけにした「地域コミュニティ」において地域貢献活動を行う「わんわんパトロール隊」のこれらの活動を支える社会的ネットワークには、旧来型の強い絆を背景とした地縁ネットワークと、弱い紐帯のブリッジ機能を活用した関係縁ネットワークの両側面を持つことが明らかとなった。「犬の散歩」をきっかけに形成されるこの複雑な有機的つながりの連関こそ「『緩やかな関係性』^{67, 68)}のネットワーク」の正体であり、「地域コミュニティ」における「互酬性の規範」や「安心・安全・信頼感」とともに、ソーシャル・キャピタルの醸成を可能としていくものと考えられた。

VI. 総合考察

本論では、「地域コミュニティで行われている余暇社会活動」の一つ「犬の散歩」をきっかけとしたネットワークが、高齢者のソーシャル・キャピタル醸成にいかに関与するか実証的に検証した。「犬の散歩」の活動には、目的と意味があり、気軽な交流が可能で、コミュニケーション媒介となる人・物・出来事が存在し、また日常的で頻度が保たれており、地域性を保つ適度な距離感があり、自ら行う能動的な活動である等、ソーシャル・キャピタル醸成に関与する特徴をバランスよく有することが指摘された。この「犬の散歩」をきっかけに形成される社会的ネットワークは、その多くが弱い紐帯で結びつく緩やかな関係性であるが、ネットワーク成員間の選択的な「関係性の展開」により派生しやすく、自律的に発展することが指摘された。また、この「関係性の展開」により形成された組織「わんわんパトロール」には、地域コミュニティにおいてさらに広く緩やかに人々を巻き込みながら、活動を継続することで、住民一人一人に地域コミュニティの社会的ネットワークの成員としての自覚と、行動を促す（自ら地域貢献的活動へ関与する、もしくは恩恵を自覚し、「わが町意識」や「お互いさま」という意識が生まれる）ことが指摘された。

高齢者が「自由な時間の楽しみ」として「地域コミュニティ」で行っている広義の余暇社会活動には「犬の散歩」の他にも様々なものが指摘される。地域コミュニティに暮らす高齢者全体を支援していく上では、本論が取り上げた「犬の散歩」のように有機的つながりを自律的に生み出し関係財へと発

展させることが可能な活動を上手く活用していくことが求められる。そのためには、キーパーソンの存在、環境条件、代替え手段やそのための選択肢の幅、旧来型の地域組織との融合、その他の地域貢献組織との有機的な連関の形成などが、ソーシャル・キャピタルを醸成する上での鍵となるものと考えられる。地域コミュニティ機能の再生は急務である。しかしながら我が国の地域コミュニティを支える地方行政や国を取り巻く現状は厳しいものがある⁷¹⁾。高齢者にとって「意味のある作業（活動）」⁶⁴⁾を見出し、モニタリングを行い必要に応じて活動への介入を図るなど、高齢者自身が自然発生的にすでに地域で行っているさまざまな活動の中に、いかにして関係財を生み出していくかが問われる。

附記

本論の研究内容のうち、研究Ⅰは、2009年老年社会科学会⁷²⁾においてポスター発表した内容に基づき加筆したものである。研究Ⅱは、2010年国際健康心理学会においてポスター発表した内容に基づき加筆したものである⁷³⁾。研究Ⅲは、2010年老年社会科学会においてポスター発表した内容に基づき加筆したものである⁷⁴⁾。

謝辞

本論の作成にあたり、ご指導ご助言を頂きました先生方、ならびに長期間にわたる調査へのご協力を賜りましたすべての皆様に感謝申し上げます。

文献

- 1) ペットフード協会 (2009) . 第16回犬猫飼育率全国調査. [HTTP://WWW. PETFOOD. OR. JP/DATA/CHART2009/INDEX. HTML](http://www.petfood.or.jp/data/chart2009/index.html) (2010年3月22日)
- 2) 愛甲哲也, 浅川昭一郎 (2003) . 都市の緑地における犬連れ利用者の実態と意識. *ランドスケープ研究*, 70 (5) 515-518.
- 3) 世田谷区 (2006) . 世田谷区民意識調査.
- 4) 塚本紗織 (2002) . 飼い犬とその飼い主による公園利用に関する研究. *都市公園*, 158, 95-103.
- 5) FRIEDMAN E. , KATCHER AH. , LYNCH JJ. & THOMAS, SA. (1990) . ANIMAL COMPANIONS AND ONE-YEAR SURVIVAL OF PATIENTS AFTER DISCHARGE FROM A CORONARY CARE UNIT. *PUBLIC HEALTH REPORTS*, 95 (4) 307-312.
- 6) LOCKWOOD R. (1983) . THE INFLUENCE OF ANIMALS ON SOCIAL PERCEPTION: NEW PERSPECTIVES ON OUR LIVES WITH COMPANION ANIMALS, *MARRIAGE AND FAMILY REVIEW*. 64-71.
- 7) VEEVERS JE. (1985) . THE SOCIAL MEANINGS OF PETS ALTERNATIVE ROLES FOR COMPANION ANIMALS. *MARRIAGE AND FAMILY REVIEW*, 8, 11-30.
- 8) GOLDMEIER J. (1986) . PETS OR PEOPLE “ANOTHER RESEARCH NOTE” . *THE GERONTOLOGIST* 26, 203-206.
- 9) 安藤孝敏 (2001) . 高齢者とペット動物. *老年社会学*, 23 (1) 25-30.
- 10) 金児恵 (2006) . コンパニオンアニマルが飼主の主観的幸福感と社会的ネットワークに与える影響. *心理学研究*, 77 (1) 1-9.
- 11) LAIL P. , MCCORMACK GR. & ROCK M. (2011) . DOES DOG-OWNERSHIP INFLUENCE SEASONAL PATTERNS OF NEIGHBOURHOOD-BASED WALKING AMONG ADULTS? A LONGITUDINAL STUDY. *BMC PUBLIC HEALTH*, 4, 11 (1) 148.
- 12) COLMAN KJ. , ROSENBERG DE. , CONWEY TL. , SALLIS JF. , SAELENS BE. & CAIN K. (2008) . PHYSICAL ACTIVITY, WEIGHT STATUS, & NEIGHBOURHOOD CHARACTERISTICS OF DOG WALKING *PREVENTIVE MEDICINE: AN INTERNATIONAL JOURNAL DEVOTED TO PRACTICE AND THEORY*, 47 (3) 309-312.
- 13) ROGERS J. , HART LA. & BOLTZ RP. (1992) . THE ROLE OF PET IN CASUAL CONVERSATIONS OF ELDERLY ADULT. *THE JOURNAL OF PSYCHOLOGY*, 133 (3) 265-277.

- 14) THORPS RJ., KREISLE RA., GLICKMAN LT., SIMONSICK EM., NEWMAN AB. & KRITCHEVSKY SB. (2006). PHYSICAL ACTIVITY & PET OWNERSHIP IN YEAR 3 OF THE HEALTH ABC STUDY. J AGING PHYS ACT, 14 (2) 154-68.
- 15) CUTT H., GILES-CORTI B., KNUMAN M., TIMPERIO A. & FIONA B. (2008). UNDERSTANDING DOG OWNERS' INCREASED LEVELS OF PHYSICAL ACTIVITY; RESULTS FROM RESIDE. AMERICAN JOURNAL OF PUBLIC HEALTH, JAN, 98 (1) 66-69.
- 16) HOERSTER KD., MAYER JA., SALLIS JF., PIZZI N., TALLEY S., PICHON LC. & BUTLER DA. (2011). DOG WALKING; ITS ASSOCIATION WITH PHYSICAL ACTIVITY GUIDELINE ADHERENCE & ITS CORRELATES. PRE MED, 52 (1) 33-8
- 17) 内閣府 (2007). 平成 19 年度版国民生活白書, ぎょうせい.
- 18) 園田碩哉 (2002). 余暇の現代史 (一番ヶ瀬康子, 園田碩哉編) 実践・福祉文化シリーズ第 5 巻; 余暇と遊びの福祉文化, 32, 明石書店.
- 19) 園田碩哉, 西野仁 (2003). やさしいレクリエーション実践 10, 日本レクリエーション協会.
- 20) 安梅勅江, 藤原亮次, 杉澤悠圭, 伊藤澄雄 (2006). 高齢者の社会関連性と生命予後, 社会関連性指標と 7 年間の死亡率の関係. 日本公衆衛生雑誌, 53 (9) 681-687.
- 21) GALIT N. (2007). RETIREERS' LEISURE: ACTIVITIES, BENEFITS, & THEIR CONTRIBUTION TO LIFE SATISFACTION. LEISURE STUDIES, 26 (1) 65-80.
- 22) 小林江里香, 杉原陽子, 深谷太郎 (2005). 配偶者の有無と子供との距離が高齢者の友人・近隣ネットワークの構造・機能に及ぼす効果. 老年社会科学, 26 (4) 438-450.
- 23) 古谷野亘, 岡村清子, 安藤孝敏, 長谷川万希子, 浅川達人, 横山博子, 松田智子 (1995). 都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関連する要因. 老年社会科学, 16 (2), 115-124.
- 24) 西村純一 (1997). 定年退職期のライフスタイルと社会的ネットワークとの関係. 東京家政大学研究紀要, 37 (1) 261-269.
- 25) 島貫秀樹, 崎原盛造, 芳賀博, 安村誠司, 新野直明, 鈴木征男, 命今 (2003). 沖縄農村地域の高齢者における交流頻度と生活満足度および精神的健康との関連; IADL レベルによる比較. 民族衛生, 69 (6) 195-204.
- 26) 岡戸順一, 星旦ニ (2002). 社会的ネットワークが高齢者の生命予後に及ぼす影響. 厚生指標, 49 (10) 19-23.
- 27) 岡本秀明, 岡田進一 (2007). 大都市居住高齢者の社会活動に関連する要因; 身体・心理・社会・環境的要因から. 日本公衆衛生雑誌, 53 (7) 504-515.

- 28) エイジング総合研究センター (2003) . 高齢社会基礎資料 02-03 年版. 中央法規出版.
- 29) 工藤由貴子, 平野順子, 袖井孝子 (1998) . 高齢者と都市の生活環境 (第 1 報) 地域特性と生活行動. 日本家政学, 49 (11) 1199-1208.
- 30) 手島陸久, 冷水豊 (1992) . 高齢者の余暇活動の即敵に関する研究. 社会老年学 35, 19-31.
- 31) 佐藤秀紀, 佐藤秀一, 山下弘二, 山中朋子, 柴田ミチ, 鈴木幸雄, 松川敏道 (2001) . 地域在宅高齢者の社会活動に関連する要因 厚生指標, 48 (11) 12-21.
- 32) 竹田徳則, 近藤克則, 平井寛, 斎藤嘉孝, 吉野清子, 松田千代栄, 松田亮三 (2005) . 地域在住高齢者の趣味活動と社会経済的地位. 日本公衛誌, 69 (5) 406-410.
- 33) 今井忠則, 山川百合子, 間中麻耶, 関口清香, 土澤健一, 戸村成男 (2008) . 地域中高年者が社会貢献性のある役割を新たに獲得することによる健康関連 QOL の変化. 茨城県立医大紀要 13, 83 - 89.
- 34) 高橋美保子, 柴崎智美, 橋本修二, 川上 憲人, 玉腰暁子, 尾島俊之, 永井正規 (2000) . 全国市町村による高齢者の社会活動支援事業の実施状況の評価. 日本公衆衛生雑誌, 7, 47-54.
- 35) 大山さく子 (2005) . 高齢者の転倒予防教室に対する不参加者の特性. 介護福祉学, 12 (1) 147-157.
- 36) 内閣府国民生活局 (2003) . ソーシャル・キャピタル ; 豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて, 国立印刷局.
- 37) 内閣府国民生活局 (2009) . 国民生活選好度調査 21 年版. [HTTP://WWW5. CAO. GO. JP/SEIKATSU/SENKODO/SENKODO. HTML](http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/senkoudo.html) (平成 21 年 6 月 19 日)
- 38) 近藤克則 (2010) . 編集検証健康格差社会 ; 介護予防に向けた社会疫学的大規模調査. 医学書院.
- 39) 稲葉美由紀 (2008) . 高齢者ケアを基盤としたコミュニティ形成 ; エンパワメント・モデルとソーシャルワークの実践の課題. 都市政策研究, 5, 17-30.
- 40) 岸玲子, 堀川尚子 (2004) . 高齢者の早期死亡ならびに身体機能に及ぼす社会的サポートネットワークの役割 ; 内外の研究動向と今後の課題. 日本公衛誌, 51 (2) 79-93.
- 41) 地域包括ケア研究会 (2010) . 平成 21 年度老人保健健康増進等事業による「地域包括ケア研究会報告書. ([HTTP://WWW. MURC. JP/REPORT/PRESS/100426. PDF#SEARCH='](http://www.murc.jp/report/press/100426.pdf#search=)) .
- 42) 内閣府大臣官房政府広報室 (2010) . 国民生活に関する世論調査. [HTTP://WWW8. CAO. GO. JP/SURVEY/H22/H22-LIFE/INDEX. HTM](http://www8.cao.go.jp/survey/h22/h22-life/index.htm) (2010 年 6 月)

- 43) PUTNAM RD. (1993) . MAKING DEMOCRACY WORK ; TRADITIONS IN MODERN ITALY PRINCETON, NJ, PRINCETON UNIVERSITY PRESS.
- 44) DALY M. (2002) . DALY M CARE AS A GOOD FOR SOCIAL POLICY.
- 45) 山口麻衣 (2007) . 「介護の社会化」論とソーシャル・キャピタルとしてのケア. 宇都宮短期大学人間福祉学科研究紀要, 5, 15-30.
- 46) ISLAM MK, GERDTHAM, UG, GULLBERG B, LINDSTROM M. & MERLO J. (2008) . SOCIAL CAPITAL EXTERNALITIES & MORTALITY IN SWEDEN. ECONOMICS & HUMAN BIOLOGY, 6 (1) 19-42.
- 47) KAWAUCHI I. , KENNEDY BP. & ROBERTA G. (1997) . SOCIAL CAPITAL & SELF-RATED HEALTH : A CONTEXTUAL ANALYSIS. AMERICAN JOURNAL OF PUBLIC HEALTH, 277, 918-924.
- 48) 近藤克則 (2004) 人間関係と健康 (社会疫学への誘い3) . 公衆衛生 68 (3) : 224-228”
- 49) MOHAN J. , TWIGG E. , BARNARD S. & JONES K. (2005) . SOCIAL CAPITAL, GEOGRAPHY & HEALTH: A SMALL-AREA ANALYSIS FOR ENGLAND, SOCIAL SCIENCE & MEDICINE, 60 (6) 1267-128
- 50) 市田行信 (2007) . ソーシャル・キャピタル：地域の視点から, 近藤克則編, 検証「健康格差社会」. 医学書院, 107-115.
- 51) 藤澤由和, 濱野強, 小藪明生 (2007) . 地区単位のソーシャル・キャピタルが主観的健康管に及ぼす影響. 厚生指標, 2, 18-23.
- 52) 大貫英史, 狩野照誉, 稲葉陽二 (2008) . ソーシャル・キャピタルと主観的な健康感及び精神的健康との関連;近郊都市の市民活動による環境即敵尺度を用いたスノーボール調査より. 日本公衛誌, 63 (2) 459.
- 53) 湯浅資之, 中原敏隆 (2007) . 社会関係資本による健康な街づくりのプロジェクト構築に関する検討 : 国際協力機構・東北ブラジル健康なまちづくりプロジェクトの事例から. 民族衛生, 73, 70-77
- 54) 志水泰, 小関久恵, 吉村藍 (2005) . 島きょう地域住民の主観的健康感の関連要因に関する研究. 厚生指標, 53 (13) 14-19
- 55) 本橋 豊・金子 善博・山路 真佐子 (2005) . ソーシャル・キャピタルと自殺予防秋田県公衆衛生学雑誌, 3 (1) 21-31.

- 56) 湯浅資之, 西田美佐, 中原敏隆 (2006) . ソーシャル・キャピタル概念のヘルスプロモーション活動への導入に関する検討 日本公衛誌 53 (7) 465-470.
- 57) 鈴木征男 (2008) . 社会関係資源と地域生活. LIFE DESIGN REPORT, 9 (10) 4-15.
- 58) 立木茂雄 (2008) . ソーシャル・キャピタルの視点から見た地域コミュニティの活性度と安全・安心. 都市関連研究 5, 50-73.
- 59) 安田雪 (2011) パーソナル・ネットワーク, 人のつながりがもたらすもの. 新曜社.
- 60) 余暇開発センター (2006) . レジャー白書 2006, 団塊世代・2007年問題と余暇の将来.
- 61) 余暇開発センター (2009) . レジャー白書 2009, 不況下のレジャー・フロンティア.
- 62) 山田孝, 石井義和, 長谷川龍太郎 (2002) . 高齢者版興味チェックリストの作成. 作業行動研究, 6 (1) 25-35.
- 63) 川喜田二郎 (1970) . 続・発想法 - KJ法の展開と応用, 中公新書. 中央公論社.
- 64) 社団法人日本作業療法士協会 (2009) . 平成20年度老人保健健康増進等事業, 高齢者の持てる能力を引き出す地域包括支援のあり方研究報告書.
- 65) 世田谷区研修調査室 (2006) . せたがや統計館. [HTTP://WWW. CITY. SETAGAYA. TOKYO. JP/TOUKEI/INDEX. HTML](http://www.city.setagaya.tokyo.jp/toukei/index.html) (2006年8月5日)
- 66) KAHN RL. & ANTONUCCI TC. (1980) . CONVOY OVER THE LIFE COURSE, ATTACHMENT, ROLES, AND SOCIAL SUPPORT. LIFE SPAN DEVELOPMENT AND BEHAVIOR, 13, 253-286.
- 67) 番場美恵子, 竹田喜美子 (2003) . シルバーステージから見た高齢者の近隣交流に関する研究. 日本家政学会誌, 54 (6) 491-499.
- 68) 久保妙子 (2003) . 近接型住宅地における近隣コミュニケーションの現状と意識. 日本家政学会誌, 54 (1) , 27-37.
- 69) 平野敦士・カール, アンドレイ・ハギウ (2011) . プラットフォーム戦略. 東洋経済新報社
- 70) GRANOVETTER M. (1973) . THE STRENGTH OF WEAK TIES. AMERICAN JOURNAL OF SOCIOLOGY, 81, 1287-1303.
- 71) 関東経済産業局 (2009) . コミュニティビジネス中間支援機関のビジネスモデルに関する調査報告書. ([HTTP://WWW. KANTO. METI. GO. JP/SEISAKU/COMMUNITY/DATA/H2ONOVA_1_HYOUSHI_1SYOU. PDF](http://www.kanto.meti.go.jp/seisaku/community/data/H2ONOVA_1_HYOUSHI_1SYOU.PDF))

72) 菊池和美, 長田久雄 (2009) . 健康な中高年者が自由な時間の楽しみとして行っている余暇活動. 老年社会科学, 31 (2) , 173 (ポスター発表) .

73) KIKUCHI K. & OSADA H. (2010) . JAPANESE PET OWNERSHIP PSYCHOLOGICAL AND SOCIAL CHALLENGES. INTERNATIONAL CONGRESS OF APPLIED PSYCHOLOGY. (口述発表) .

74) 菊池和美, 長田久雄, 上野佳代 (2010) . 犬の飼い主を中心とした地域防犯活動に関する質的検討; ソーシャル・キャピタル醸成にかかわる高齢者の市民活動. 老年社会科学, 32 (2) 160. (ポスター発表)

以上